

加藤清正の実像

天正4年(1576)、織田信長は中国地方の毛利氏を攻めるため、羽柴秀吉に中国攻めを命じました。これより秀吉は、信長が本能寺で斃れる天正10年まで中国攻めに忙殺されることとなります。この中国攻めが、清正にとって出世の足掛かりとなりました。

(3) 初陣

秀吉の生涯の中で最も戦に明け暮れた中国攻め。秀吉は苦戦しながらも播磨国、但馬国を次々と勢力下に組み込みながら兵を西へと進めていきました。10代後半だった清正は、当初より秀吉の中国攻めに従軍した可能性もありますが、天正9年の鳥取城攻め以前については残念ながら史料上では確認することはできません。不明な点が多いこの時期の清正ですが、中国攻めの最中の天正8年9月19日、初めて秀吉から近江国神崎郡内(現在の滋賀県東近江市)に120石の領地を与えられています。確実な史料上で清正の名前が歴史に登場するのはこの時からです。この時清正19歳。ようやく秀吉から一人前の家臣として認められた重要な史料です。天正8年9月と言えば、秀吉による第一次鳥取城攻めの直後にあたります。時を同じくして秀吉から領地を与えられているということは、清正はこの戦で何らかの戦功を挙げたのかもしれませんが。

さて、鳥取城主・山名豊国の降伏により因幡国を手中に収めつつあった秀吉ですが、豊国の旧臣たちはいまだ鳥取城に籠城し、秀吉に対して徹底抗戦の構えを見せていました。しかも毛利氏の有力家臣であった吉川経家とその軍勢が籠城に加わったことで、秀吉は鳥取城の攻略作戦を練り直します。こうして天正9年6月より第二次鳥取城攻めが始まります。秀吉自身が後年「鳥取の濁殺し」と呼んだ日本史上最も凄惨な兵糧攻めが展開されました。4か月におよび籠城戦も吉川経家の切腹で幕を閉じ、秀吉は因幡国を平定しました。前に見たように、前年に120石の領地を与えられ、正式に秀吉の家臣に加えられた20歳の清正は、秀吉に従い、この戦いに参加したものだと思われます。これら一連の鳥取城攻めが秀吉



▲鳥取城跡(鳥取市東町)



家臣として清正が体験した初めての戦だったと言えるでしょう。

この時の鳥取城を攻めた際のエピソードが「清正記」に書かれています。それによれば、清正は蜂須賀小六と2人で城の物見に出掛けた際、20人ほどの敵兵に囲まれながらも1人の首を討ち取り、無事帰陣して秀吉を大いに喜ばせたというものです。感心した秀吉は、ひとすくいの砂金と次の感状*を清正に与えたと言われています。

少し読みにくいかもかもしれませんが、書かれている内容を簡単に言えば、敵兵を倒したことを秀吉が褒め称えて、その褒美として領地を100石加増するというものです。これについては、まず原本が残されていないこと、当時秀吉が発給したほかの感状に比べるとやや不自然な文章、さらにこの後100石の領地を与えられた形跡がないことなどを考えると、この感状は後世に創作された偽文書*の可能性が高いです。こうなると蜂須賀小六と物見に出掛けた話も信憑性に疑問が残ります。しかし、いずれにせよ清正は、この鳥取城攻めを契機として以後秀吉の戦争に本格的に従軍し、その働きぶりを認められて武将として出世していくこととなります。

因幡国鳥取之城、為可責崩著陣、為物見遺刻、伏兵起候処、以半弓敵射退、其上太刀打之高名、誠以神妙之至也、因茲為加増百石宛行畢、弥於抽軍忠者可加増者也、仍如件
天正九年六月廿九日 秀吉 御判
加藤虎之助殿

▶秀吉からの感状

*感状…合戦などで戦功を挙げた者を褒賞するために発給された文書
*偽文書…家の由緒や歴史を装飾するために後世に偽造された文書